

てくれましたが、一方で怖さの象徴でもありました。なぜなら、岡山から新見に向かう際に利用する国道一八〇号線は、高梁川に沿って谷を縫うように通っている道なのですが、夜の一八〇号線はとても暗く、狭く、寂しい道で、対向車に出会うこともまれだったからで、小さいころはお化けが出るのではないかとよく思ったものです。

新見では、こんなことを考えていたものですから、帰京後も新見について知りたいと思い、いろいろと調べてみました。調べていくうちに、この地には中世に京都の東寺というお寺の領地であった「新見荘」という荘園があったことが分かりました。さらに調べていくと、網野善彦氏がその新見荘のあたりについて河川交通を利用した流通路として栄え、荘園の中にある市庭（市場）は「都市的な場」であった、と指摘していることを知りました。

驚いたのは、この流通路として利用されていたのが、私が暗い、寂しいというイメージを持っていた国道一八〇号線沿いの高梁

川であり、「都市的な場」とされた市場も国道一八〇号線沿いにあったということでした。中世の新見は私がもっていたイメージとは全くことなるところだったのです。

このことは私に、当たり前前のが当たり前でないことを気づかせてくれる歴史の素晴らしさと、身近な場所に歴史を感じることのできる日本史の素晴らしさを教えてくれました。そして、以上のようなきっかけを経て、私は歴史の世界に入りました。

この世界に入ってしまったのは、小説や研究者による概説書や論文などで述べられている歴史と、古文書・絵画史料・農村の水利施設のような現地調査により得られる情報から知ることのできる歴史とは全く異なり、後者の方がはるかに魅力的であることでした。その魅力とはそれぞれの時代に生きた人のナマの言葉・気持ちに接することができる点にあるように思います。

これらの史料は、小説などに比べると理解するためにいろいろと訓練を積む必要もあり、面倒な面もあります。しかし、こ

れらの史料を読み解くことを通じてこれまでの研究者が注目しなかったような歴史事実を発掘することもでき、発見した時の感動は何とも言えません。また、わかりにくいものを読み解こうとする努力を通じて、普段の生活においても人を理解する能力を磨くことができるように思います。これらの史料を読む技術を身につけるには大学の日本史学科が最も恵まれた環境を提供してくれています。皆さんも、ぜひ日本史コースで過去に生活していたさまざまな人々のナマの声を聞いてみてはいかがでしょうか。

中国と科学社会

飯山 知保

中国という我々の巨大な隣国を考える際に最も重要な特質の一つは、その世界最大級の多民族国家という点である。法で認定された民族集団だけでも五六を数えるが、これはあくまで最大公約数的な分類であり、

実際には数百の民族集団が存在するといわれる。さらに、総人口のおよそ九二%以上を占める漢民族の間にも、各地域や祖先の

来歴によって、言語・習俗から身体的特徴に至るまで著しい差異が存在する。こうした非常に多様性をいかに統合するかという点は、その政治・経済の動向と共に、今後の中国の姿を見つめてゆく上で極めて重要な観察対象であろう。そして、この問題を理解する上で絶対に看過してはならないのが、歴史上の中華王朝がいかにして多民族の統合に向き合い、その結果として現在の状況がどのように生まれたのかという歴史的な背景である。発表者が研究を始めるきっかけとなった問題意識は、おおよそこのようなものであった。

歴史上、《多元社会の統合》は歴代中華王朝が常に直面した課題であり、その対処に失敗すると、最悪の場合王朝自体の滅亡を招来することもありえた。しかし、一世紀における科举制度の確立は、とくに《中国本土 China proper》と呼ばれる漢

民族が人口・文化の上で支配的な地位を占める地域において、そうした課題への対処に大きく寄与することとなる。

《科举制度》とは、「儒学經典に関する試験による官僚登用制度」であり、多元社会を統合する上で重要な求心力の源となった。明清期（一三六八―一九一二）を例に挙げると、科举制度の求心力は、儒学的教養（儒教經典・註釈書・史書の理解・暗記）が伝統的かつ実利的な知識として認知されて、富裕層の間でその複雑・煩瑣な学習が世代を越えて繰り返され、また、主に官職獲得（科举合格）の手段としての儒学の権威が、信仰（文運・試験合格を司る文昌帝君信仰など）や演劇などにより一般庶民にも広く認知されることになった。かかる状況下で、新たに経済的な余裕を得た家系が不断に学習者を輩出することで、儒学習得は通時代的な普遍性を保証された。つまり、儒学を習得さえすれば基本的に万人に官僚への道が開かれており、多元的な臣民の間に共通の世界観・価値観を共有させる強力

な役割を果たしたのである。この科举制度を紐帯とする自己完結した社会を、《科举社会》と呼ぶ。

ただし、《科举社会》の形成過程には不明な点が多い。とくに、一一―一三世紀に北方から侵入してきたキタイ（契丹）・ジュシェン（女真）・モンゴルたちは、なぜ、いかにして科举制度（＝煩瑣な儒学經典の学習）を受容したのだろうか。換言すれば、《科举社会》はどのように多文化と接触し、その勢力範囲を拡大していったのか、先行研究は皆無であり、その原因は、関連史料の少なさにあった。

ところが、一九九〇年代以降、中国でキタイ・ジュシェン・モンゴル支配期に関する碑刻（石刻）史料が続々と公刊され、史料の限界が打破されつつある。もともと、王朝の正史や著名な文人の文集などの文献史料は、政治史・外交・戦争など国家的事柄が記述の主な対象であるが、碑刻史料は地域社会の様々な事柄が記録され、数量も豊富であり、科举制度需要に関する具体的

な情勢が比較的明瞭に看取できる。さらに、未発表の碑刻が中国にはまだまだ数多く現存し、今後さらなる新発見が続く可能性が高い。

発表者は現地調査などを通じてこうした碑刻史料を収集・整理し、従来は歴史上の空白であった、《科举社会》の拡大過程について研究を進めてきた。そして、一一一四世紀中国において、外来民族集団の本来の社会構造が、拡大戦争の停止や屯田政策の行き詰まりなどによって変質・崩壊した時、儒学習得と科举受験は当該地域の人々に社会的地位の確保や官職の獲得の機会を与える受け皿としての機能を果たしたと考えている。つまり、この科举制度のいわば社会政策としての側面が、《科举社会》がさしたる反発を経験することなく勢力圏を拡大していった背景にあるとの推測だが、これをさらに実証的に裏付けるためには、より多くの史料、とくに碑刻史料の収集が不可欠となる。

中国史研究にはまだまだ手付かずの新出

史料が山積している。それらに光を当てて歴史の空白を埋めてゆくことは、過去の中国を理解するためだけでなく、現代中国を考える上でも貴重な土台となるだろう。

歴史をとおして現代をみる

久保山 尚

今日は学部生のみなさんに、歴史学とはどういう学問か、また歴史学を学ぶことの意味とは何かということについて話をしろと言うことなので、私自身の観点から、まずは私がどのような経緯で研究をするようになったのか、そして次に歴史を学ぶことはどういう意味を持つのか、この二点を簡単に話させていただきます。

私がみなさんのように学部生だったころは、あまり勉強熱心な学生ではありませんでした。授業は遅刻、来ても途中で飽きて寝る、酷いときは代返してもらったり、出席を取り終わったら教室を抜け出すなど、

いわゆるダメ学生でした。

ですが一方で大学の授業以外にもいろいろなことに関心があり、雑誌や新聞など、様々なメディアで話題になっている当時の独特の思想状況にも興味がありました。私が学部生のころは戦後五〇年を迎えて、日本人とは何か、国家・国民とは何か、そういった問題、いわゆるナショナリズムやナショナル・アイデンティティといった問題がにわかに論じられ始めていた時期でした。私が気になっていたのは、日本と韓国や中国との歴史を巡る関係に象徴されるような、なぜある国民・民族同士が嫌悪し、敵対しあうか、という問題でした。私は二年のときになんとなく西洋史専修に進級していたのですが、そういった現代的な問題に興味を持つようになりました。

学部の三年の科目登録のときに、西洋史の村井誠人先生の「民族問題と国境」という演習を見つけました。私は迷わず登録しました。この授業は主にヨーロッパにおける国境紛争・問題を扱うのですが、それを